

## 第七章 グアタパラ耕地の米作

グアタパラ耕地の米作は、北村政吉(拓務省勸業部農事指導員三重県出身、渡伯大正3年“1914年”、妻ミヨシ)がモンブカに米作移民22家族を配耕。その1人大和栄氏(おおわ・さかえ)長野県松本出身、1881年(明治13年生)が米作りに励む。〔(2004年3月頃ニッケイ新聞ぶらっさに投書記事の中(3月4日サン・パウロ中山保己記))、戦前の日本練習艦隊一行グアタパラ耕地の日本人米作地を訪問との記載あり。〕

戦前の日本軍艦のブラジル訪問は1910年(明治43年)巡洋艦「生駒」が来ている。アルゼンチン独立百周年祭典に特派され帰途に、2年前に日本難破船から20名をブラジル軍艦が救助したもので答礼の為にリオ寄港した。

練習艦隊の来伯は大正時代に入ってから2度ある。初めは1920年11月28日サントスに「浅間」、「磐手」の2艦が入港、司令官は舟越揖四郎中将であった。

次は1922年9月3日(リオ)、9月16日(サントス)で「浅間」、「磐手」、「出雲」の3艦が司令官谷口尚真中将に率いられて、ブラジル独立百周年祭典に参加、リオ「磐手」サントス「浅間」で旗艦が交替している。

舟越中将一行はグアタパラ耕地の日本人米作地を訪問し、谷口中将一行はレジストロ植民地を視察して邦人移住者に対する関心を示している。



グアタパラ耕地内で農作業中の大和栄氏耕馬の口取り、農具の人、  
手前武夫氏、後芳夫氏、乗馬の人、左側北

### 大和栄(おおわ)氏について

戦後のグアタパラ移住地造成では、その営農計画の1つに米作が組み入れられていた。堤防構築以前(1920年頃)雨期の増水期には毎年と言ってよい程、米作地の低湿地にはモジグアス川が氾濫、モルガンテ耕主時

代にオランダ人技師の手によって、9キロの土盛の堤防が構築された。泥炭地が多く部分的に堤防の沈下した所よりモジグアス川の水が氾濫、収穫を待つばかりの稲を小舟を浮かべて刈り取り、またモルガンテ耕主は足回りに小舟を取り付けた動力式の収穫機を発案したが、思った程に能率があがらず、その収穫機もあまり使用せず長い間、耕地内に保管されていた。1960年頃堤防増築工事の折にジャミク・グアタパラ事業所々長であった白石健次氏が大和栄氏に過去の氾濫状況、米作内容などを聞くべく当時クラビーニョス市近郊に移転していた大和農場(サン・マノエール ロウタリーよりクラビーニョス市へ向かい市の少し手前右側)を訪れた(依然はコレゴ・グランデ植民地と称した)。この時80歳の栄さんであったので現在は鬼籍。ただし栄氏の子息で当時52歳の武夫パウロ、50歳の芳夫ネルソン両子息が生きておれば昔のモンブカ地区の米作の詳細がわかるかもしれない。大和農場の話に続いて、同農場の反対東側(アニヤンゲイラ街道より)に存在していた蓑原農場について記述しておきたい。

## 蓑原磯吉(みのはら いそきち)について

蓑原磯吉(みのはら いそきち) 福岡県人、大正2(1913)年9月若狭丸で渡伯。

最初にアルヴァレンガ駅フィゲイラ耕地に配耕され契約期限後ピラ・ボンフィン駅付近のサンタ・クルース耕地に2年就労。渡伯後8年の1921年には大耕地の連なるモジアナ・コーヒー地帯に於いて唯一人の日本人コーヒー耕主となる。15HAという耕地(移民40年史、南米一巡などに記載あり)であったが、子孫は脈々とその地に定住し、3代目の現在蓑原エジソン(リベイロン・プレート農村協会副代表)はノルウエー産でコンピューターを駆使した点滴灌水設備で常時8万~10万本の生食トマト栽培、数百頭を数える酪農により多収量にて表彰されること数々、酪農から出る牛糞の施しによるコーヒー栽培も多収量を誇る篤農家であるがすでに4代目に移りつつある。

\*現在ボンフィン・パウリスタ市街地を過ぎ、リベイロン・プレート市方面に至る2車線の始まる時点の右側にISOKITI MINOHARA 通り有り。

### グアタパラ通信No.68 掲載写真の説明

宮村良秋氏(弘田千代太氏姪愛味さんの主人にあたる人)当時16歳が所有する写真。この写真は1921年当時低地の稲作中耕、3頭立ての耕馬、鼻取する方は大和栄氏(長野県人明治13年生“1881年”。当時40歳)当時グアタパラ米作移民として入った22戸の1人、乗馬の人北村政吉さんと栗原さん(島根県邑智郡羽須美村出身、1913年5月若狭丸渡伯)馬の後が大和氏の息子達手前パウロ武夫(現在54歳)後方弟ネルソン芳夫。記載によれば大和氏と同じ家が20戸、モンブカ湖北西の岡地に並び今は影形も無い。この栗原為市、カナメ夫妻は米作農家で6年この地に在住、その後現在の入植が始った1962年8月25日、当時の島根県人会長難波三郎治氏(島根県飯石郡赤来町、1914年6月帝国丸渡伯)と来訪された。(近藤安雄日誌1962.8.25)。

大和さん達22戸はグアタパラコーヒー労働者とは別に米作農家として入り、グアタパラ農場主から馬や種を借り、粗収入2割を耕主に納める契約で始めた。当時日当は25ミルの時、1年目の決算では3,000ミルの借越で転耕出来ず、2年目に負債を返して、リベイロンプレート付近の借地農となり、8年目の1929年に現在のクラビーニョスに入り、低作地に排水路を縦横に掘って稲専門地に作り、今日の40アルケールスの耕地を作り上げた。(1962年7月グアタパラ通信近藤安雄筆)

\*タイパス出身のコチア組合評議員弘田利之吉氏が訪れ1921年頃当時子供で両親が米作を営んでいた思い出があると云う。(1962年3月18日、近藤安雄日誌より)

\*山下定一氏平野植民地よりグアタパラ入植15周年際に来耕祝辞の一部。

私は大正3年(1914年)15歳でグアタパラ耕地に山下永一氏の構成家族の一人として配耕された。当時は米が無く高知県出身の松岡さん(契約の1農年を終了するとコチア植民地に入植)が持参の籾種で、低地に米を作ったのが日本人米作の最初であった。以来入植者は米を食べられるように成った。平野運平氏も米作に着目し、徳島からの坂東氏を招いて、グアタパラの低地で土地改良をして米作をしてはどうかと見積をさせたところ、1000コントスかかると云うので、米作は有望だとわかっていても、誰も投資する者はなく見送った。(1コントは当時10万円位といわれ、1コントと云う金を手にしたコロノは少なかったといわれ、1コントあれば日本に錦を飾って帰国出来たという。(1977年6月25日グアタパラ通信No.248 近藤安雄筆)